

真知子

02 出合い

111

坊主頭の保夫が、夕日が差し込む図書室の片隅で、美也の手を取り、瞳を覗き込んだ。

美也はゆるいウェーブのかかった肩までの髪を耳にかけ、うつむいた。

「それじゃ保夫は、わたしと結婚して、この保護区の指導者になりたいっていのね！」

「そうだよ。美也と二人で、この保護区を守っていくんだ」

顔を上げ、瞳を輝かせて反論する美也。

「でもあたし、インテリアコーディネーターになりたいの。素敵な家具に囲まれて暮らしたい」

「保護区でだってできるよ」

「どうやって！」

「材料になる木はいくらでもあるんだ。作ればいいよ！」

「それはそうだけど、わたしにできるかしら？」

「僕にできることなら、何でもするよ！」

「でも今は答えられない」

「卒寮して、自由区で就職して、技術を身につけて、保護区に帰る時にもう一度聞くよ。僕の気持ちはずっと変わらない」

「わたしは戻らないかもしれない」

「美也はきっと戻るよ。ここで暮らしてきたんだもの」

保夫に背を向ける美也。窓の外を見る。12歳くらいの女の子が歩いていく。美也が指差し、保夫に知らせる。

「誰だろう。わたしたちと同じ年くらいだけど、見たことない子ね」

「本当だ。保護区入りはたいてい7歳ころだし、時期も早い。何しに来たんだろう？」

大人に囲まれ、隠されるように進む女の子は、背中まで届く長い髪を風になびかせ、不満そうに歩いていた。

「センターの客室に案内するみたい。わたしたちに会わせないつもりなのかしら？」

「何かわけがあるんだろう。あとで父さんに聞いてみるよ」

「そうね。区長さんなら知っているでしょうね。何か分かったら教えて」

歩き出す美也。後を追う保夫。

「もう夕食の時間だわ。食堂に行きましょう」

「今夜、一緒に星を見ないか？」

「ごめん、先約があるの。行けたらいく。いつもの土手ね」

「うん、もうすぐ入寮だからね。今のうちに一緒に見ておきたいんだ」

図書室を出る美也と保夫。

* * *

給食を食べ終えた保夫は、父の家に急ぐ。

保夫の両親は、ともに保護区で暮らしている。遊ぶのが仕事の6歳までは母と、勉強や手伝いが始まる7歳からは父と暮らしている。区長の仕事を覚えるため、自分から父と暮らしたいと母

に頼んだ。

区長の仕事は、保夫が想像していたよりも忙しく、保護区中を歩き回って、話を聞き、自然や設備を見回り、書類を読み、外の世界と交渉する。

忙しく働く父の唯一の趣味が星を見ることで、小さいころから父に連れられ、土手に寝転がって、一緒に星空を眺めた。大きくなった今では、一人で毎日のように眺めている。

保夫には星座も惑星も区別がつかない。名前に興味もない。ただ、この世界の外に世界があって、さらに外にも世界があって、ずっとずっとつながっている。そう思うと不思議な気持ちになれた。心細いような、魅惑されるような、複雑な感情を抱いた。

保護区という狭い地域に暮らしていても、宇宙という広い世界につながっている。どこにいても宇宙の一部であり、大きな何かとつながっている。そんな風に安心もできた。

* * *

保夫が家に入ると、父が椅子に座っていた。

「こんな時間に家にいるなんて珍しいね、父さん」

「保夫を待っていたんだ。さあ座りなさい」

食事仕事勉強遊びも外で行うため、家にはベッドと机と椅子と収納棚しかない。家とは名ばかりの、ただ眠るため、荷物をしまうためだけに与えられた私的な空間。

保夫は、ベッドに座りながら父に話し始めた。

「さっき知らない女の子がセンターに入るのを見たよ」

「保夫はもう見てしまったのか。それなら話が早い。入寮するまでここで預かることになった。名前を真知子という。真実の真に、知るに、子どもの子と書くそうだ」

「同じ年ぐらいに見えたけど、こんな時期にどうしてここに来たの？」

「彼女は自由区の無法地帯で発見されて、保護されたんだ」

「え、ホント！ そんなことって本当にあるんだ」

「ああ、追っ手がかかるかもしれない。だから、部外者がいればすぐにわかる保護区に預けられることになった」

「それじゃあ、ずっとここにいるの？」

「いや、お前たちと一緒に横浜の工場で働くことになっている。入寮する」

「外に出して大丈夫なの？」

「危険はあるが、どんな理由があれ、保護区に入るためには卒寮しなければならない。彼女が持っている権利を犯すことはできない。いいか保夫、お前が彼女を守ってあげなさい。彼女には頼る人がいないのだから」

「いいけど、僕を信頼してくれるかな？」

「してくれるかじゃない。してもらえるように努力することだ。保夫にとって、区長になるための最初の試練だと思えばいい」

「わかった。やってみるよ」

「明日会わせるから、今日はもう好きに過ごしなさい」

「うん、星を見に行ってくる」

「ああ、楽しんでおいで」

家を出ると、保夫は土手に急いだ。

* * *

春の夜風は冷たい。しかし心地よい。

保夫は、土手に座り、風に身を任せ、星空をぼんやり眺めていた。

すると足音が響いた。

美也が遊びに来たのだと思い、脅かすため、保夫は地面に伏せた。

ザッザッザ。

近づく足音を目印に、立ち上がった保夫が手を伸ばし、きつく腕をつかむ。

「いやあああああ〜」

声に驚き、手を離す保夫。殴りかかる人影。保夫が痛さに悲鳴を上げる。

「待って、僕が悪かった。人違いしたんだ。落ち着いて！」

尚、叩き続ける人影の腕をつかみ、顔を覗き込む。夕方見た少女、真知子だった。

「真知子さんだよ。ごめん、友達だと思ったんだ。脅かして悪かった」

「もう嫌なのよ。わたしは幸せだったわ。かわいそうなんかじゃない！」

アーンと声を上げて泣き出す真知子。

「帰して、わたしを家に帰して！」

保夫に懇願する真知子。真知子の手をとり、黙って見つめる保夫。

「いったいどうしたの？ 僕でよかったら話してみよ」

「ここはいったいどこなの？ お母さまと雄馬さまはどこにいるの？ どうして帰っちゃいけないの？ なんでこんなところにつれてきたの？」

「詳しいことは僕には分からないけど、4月になったら、僕たちは寮に入って、工場で働くんだ。平等に与えられた権利であり、義務でもある」

「仕事なら家でもしていたわ。どうして寮に入らなくちゃならないの？」

「詳しいことは僕にも分からない。でも国を守っていくために必要なことだって、父さんたちが話していた」

「国とわたしと何の関係があるの？ わたしはただ帰りたいたいだけなのに」

「3年頑張ったら、好きなところに行けるよ」

「お母さまのところに帰れるの？」

「うん、成人して自分のことは自分で選ぶ権利が与えられるからね」

「でももうお母さまは生きていないだろうって、雄馬さまが罰を与えるだろうって、あんな酷い場所はないって、みんながそういうの。どうしてなの？」

「僕も噂でしか聞いたことがないから分からないけど、誰でも自分が育った場所は普通だと思うし、いいところだと思うものじゃないの？」

「それだけかしら？」

「噂だと、無法地帯は頂点に立った一人が全てを取り決める自由のない辛い世界だって話だけど、真知子さんにとっていいところだったんだ？」

「うん、みんなやさしかったし、雄馬さまは旅館に来るたびに遊んでくれた」

「でもずっと大人の世話になるわけにはいかないから、やっぱり試練を受けるしかないかなって、僕は思うよ」

「お母さまはそう思ったから旅館を出るように言ったのかしら？ 悪魔が狙っているだなんて、どうして急にあんなこと言ったのかしら。雄馬さまはわたしに何をするつもりだったのかしら？」

「僕には分からない。でも、答えは3年かけて求めれば良いと思うよ」

「そんなに待てない。わたし、とても耐えられない」

「答えが出るまで、僕も一緒に待つよ」

「あなたが？」

「うん」

土手に寝転ぶ保夫。隣に座る真知子。

「僕はここで星空を見てたんだ。よかったら一緒に見ない？」

夜空を見上げる真知子、視界いっぱい広がる星たちに驚きの声を上げる。

「星って、こんなにいっぱいあるの！」

「ここは田舎だからね、微かな光でもしっかり見える。自慢の一つだよ」

「ホロスコープは毎日見てたけど、本物の星空を見るのは始めて」

「ホロスコープ？」

保夫を振り返る真知子。

「星占いのことよ」

「ふうん、僕たちは星でつながっているんだね」

「そうかな。そうかもしれない」

涙をぬぐい、笑顔を見せる真知子。